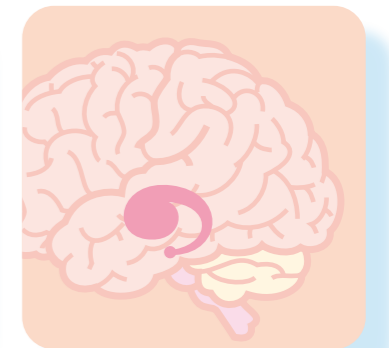


パーキンソン病の 治療と薬を 正しく理解するために

監修 伊東 秀文 先生
和歌山県立医科大学脳神経内科学講座 教授

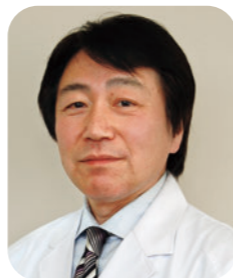


伊東先生からパーキンソン病の患者さんへのメッセージ

「パーキンソン病」というと、身体が思うように動かなくなって、車いすや寝たきりになる病気、という印象をもたれている方もあるかもしれません。しかし近年、パーキンソン病の治療は著しく進歩し、適切な治療を行えば、健康な時と同じような日常生活を長期にわたって維持することができるようになりました。現在のところ、パーキンソン病を根本的に治療する方法はありませんが、神経の病気のなかでも最も治療法の開発が進み、多くの治療選択肢がありますので、ご自身の症状をきちんと伝え、主治医と相談しながら、ご自身にあった治療を行っていくことが大切です。

また、パーキンソン病は、薬物治療とリハビリテーションによって症状をコントロールしながら長く付き合っていく病気ですので、病気に対する正しい知識をもち、患者さん自らが治療に積極的に参加する気持ちがとても重要です。治療薬の数が多く、薬の働きもさまざまですから、ご自身が服用する薬にどのような働きがあるのかを理解することが大切です。副作用をおそれて勝手に薬をやめると、症状が悪化することがありますので、気になる副作用や困ったことがあれば、主治医や医療スタッフに相談するようにしましょう。また、身体が動かしにくいから、といて動かないと、ますます動けなくなってしまうので、リハビリテーションなど積極的に身体を動かすことも必要です。

現在、パーキンソン病の新しい治療薬や治療方法の開発が進められていますので、将来、より効果的な治療が登場するかもしれません。希望をもって、日々の治療に前向きに取り組んでいただければと思います。



和歌山県立医科大学脳神経内科学講座 教授
伊東 秀文

パーキンソン病のさまざまな症状

パーキンソン病では、主に手足がふるえたり動作が遅くなったりなどの**運動症状**がみられます

パーキンソン病ではさまざまな症状が現れます。



パーキンソン病の主な運動症状

手足のふるえ

じっとしているときにふるえが起こるのが特徴で、何かしようとしたり、ある姿勢をとったりするとふるえが消えます。

多くの方は身体の片側から起こります



筋肉のこわばり

手足や首の筋肉がこわばり、他の人が動かそうとすると歯車のようにガクガクと断続的に抵抗が起こります



動作が遅い、動けない

動作を開始するのに時間がかかり、日常動作全般がゆっくりになります。また、表情が乏しくなったり、声が小さくなることもあります



姿勢が保てない、バランスを崩しやすい

進行するとみられる症状で、姿勢を変えることがスムーズにできなくなり、バランスを崩して倒れやすくなります



パーキンソン病では運動以外にもさまざまな症状（**非運動症状**）が現れます

パーキンソン病でみられる主な非運動症状

自律神経症状



精神症状・認知機能障害



睡眠障害



その他

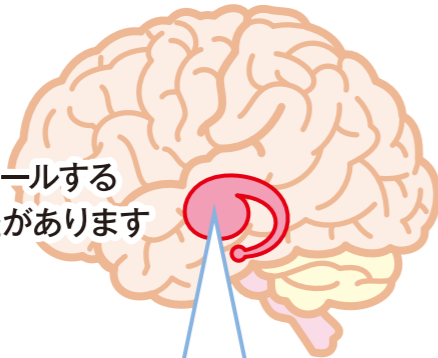


上記にあげた症状以外にもさまざまなものがあります。気になる症状があれば主治医に相談してみましょう。

パーキンソン病とは、脳のドパミンが不足して運動の指令がうまく伝えられなくなる病気です

病気の原因を理解することは治療の第一歩になります。

脳の中心部に運動機能をコントロールするドパミンを作る神経があります



脳は神経伝達物質のドパミンにより運動指令を伝達します

健康な人

パーキンソン病の患者さん

十分な量のドパミン

ドパミンの量が不足

脳の運動指令が伝わる

脳の運動指令が伝わらない

十分な量のドパミンが作られるため、脳の運動指令を体に伝えることができます。

ドパミンを作る神経細胞が減少することによりドパミンが不足して、脳の運動指令を体に伝えることができなくなります。

パーキンソン病は病気の進行によって5つの重症度に分けられます

パーキンソン病は、ドパミン神経の機能低下（ドパミンの不足）が進むに従って運動症状が悪化していきます。一般的に、パーキンソン病の重症度は以下の5つに分類されます。

病気の進行のスピードは患者さんによって異なります。



パーキンソン病の重症度分類 *

* ホーン・ヤールの重症度分類

I 度

ふるえや筋肉のこわばりが体の片側のみに現れます



II 度

ふるえや筋肉のこわばりが体の両側に現れます



III 度

姿勢やバランスが保てなくなります



IV 度

日常生活の一部に介助が必要になります



V 度

一人で起き上がったり、歩けなくなります



ホーン・ヤール重症度分類	厚生労働省の生活機能障害度分類
I 度・II 度	I 度 日常生活、通院にほとんど介助を要さない
III 度・IV 度	II 度 日常生活、通院に部分介助を必要とする
V 度	III 度 日常生活に全面的に介助を要し、独立で歩行、起立ができない

→ ホーン・ヤールIII度以上で生活機能障害度II度以上の場合、「難病医療費助成制度」が受けられます。

薬とリハビリテーションで症状を軽くし、
生活の質(QOL)を高めることができます

- ①薬を飲むこと、
- ②身体を動かすこと、
が治療の基本です。



薬物療法

不足したドパミンを補ったり、ドパミンが不足して乱れた神経のバランスを整えることで運動症状を改善させます。



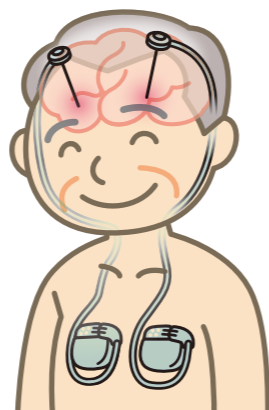
リハビリテーション

低下した運動機能を高め、薬物療法との併用によりスムーズな運動を可能にします。



パーキンソン病の手術療法（脳深部刺激療法）

薬物療法で十分な運動症状の改善が得られない場合には、手術療法が考慮される場合があります。手術療法としては、脳に電極を埋め込んで電気刺激を与える脳深部刺激療法が一般的です。



パーキンソン病治療薬には
ドパミン系薬剤と非ドパミン系薬剤の2つのタイプがあります

パーキンソン病治療薬

ドパミン系薬剤

不足したドパミンの作用を補います

パーキンソン病の運動症状は、ドパミンの不足により引き起こされるため、ドパミンを補充するL-ドパやドパミン受容体を直接刺激するドパミンアゴニストが治療の中心になります。そのほかに、ドパミンの作用を強める薬剤が補助的に使われます。

非ドパミン系薬剤

ドパミン不足により乱れた神経のバランスを整えます

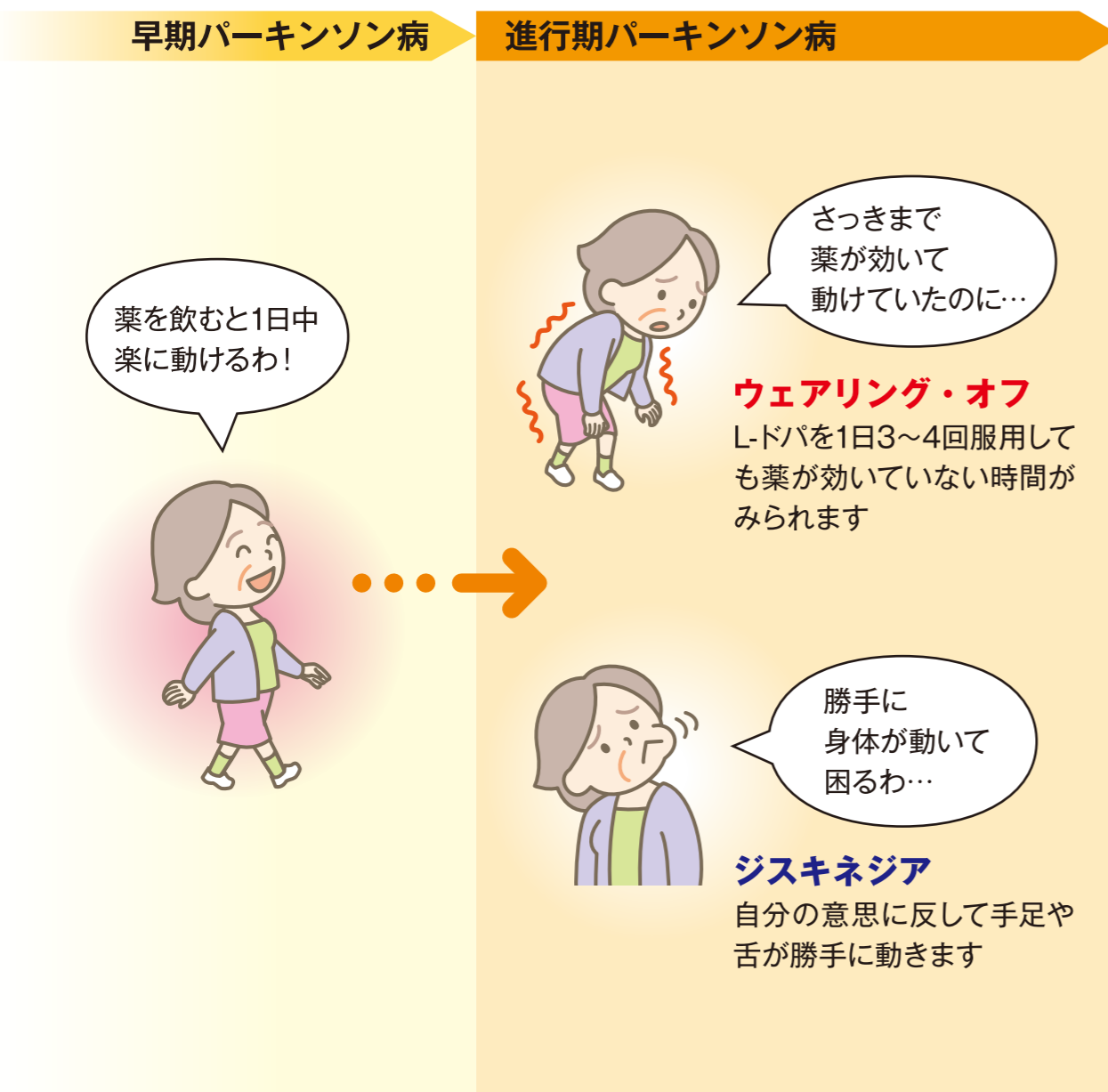
パーキンソン病では、ドパミンの不足によりドパミン神経とつながっている神経の機能異常のほか、その他の神経の機能低下も引き起こされ、運動症状に影響を及ぼします。非ドパミン系薬剤はこれらの機能異常を回復することにより運動症状を改善します。



パーキンソン病治療薬が
どのように症状を改善させているのかを
きちんと理解しましょう。

病気の進行に伴って、**運動合併症**が現れることがあります

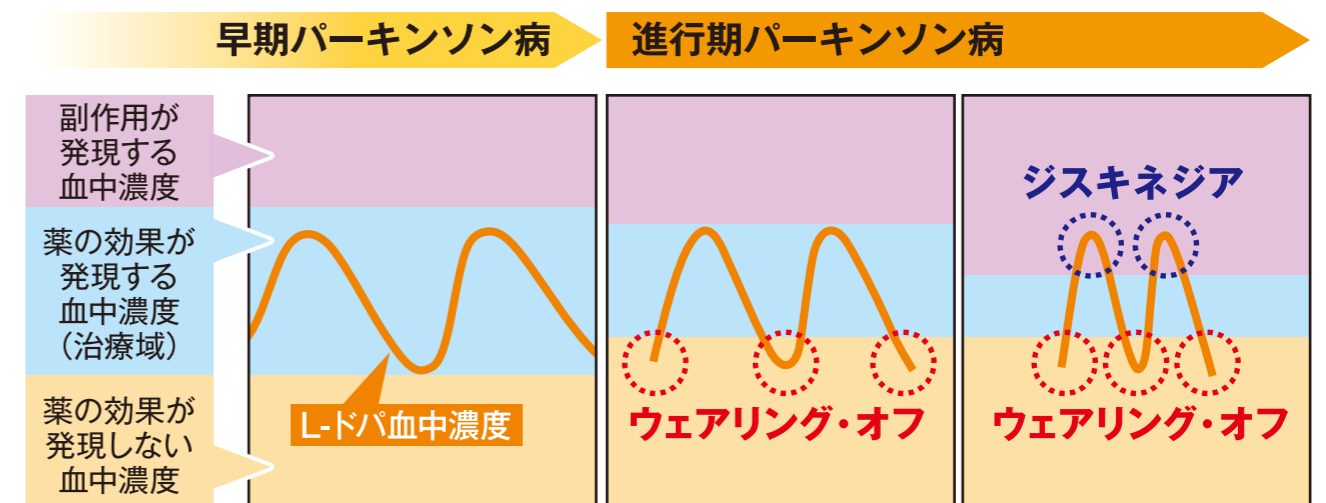
病初期には不足したドパミンを補うL-ドパで十分に症状が改善しますが、病気の進行に伴って、薬が効いている時間が短くなったり、1日のうちで薬が効く時間と効かない時間がみられるウェアリング・オフや、身体が勝手に動くジスキネジアと呼ばれる症状が現れる場合があります。これらは運動合併症と呼ばれます。



運動合併症が現れる背景には 薬の血中濃度の変動が関係しています

病気が進行して脳のドパミン神経が減ると、ドパミンを調節できなくなり、L-ドパの血中濃度の変動とともに症状も変動し、運動合併症が現れるようになります。

薬の血中濃度と治療効果・運動合併症との関連



井澤眞沙江, 伊東秀文, 日内会誌 102: 1938-1945, 2013より一部改変

このような場合は…

- L-ドパを飲むタイミングや量を変更する
 - 他の薬剤を追加する
- といった薬物療法の調整が行われます。

このような症状が現れたら、主治医に相談しましょう。



主治医の指示を守って飲みましょう

パーキンソン病治療薬にはいろいろな種類があります。主治医は、一人ひとりの患者さんの生活や症状の程度に応じて治療薬を選び、用量をきめ細かく調節していますので、処方どおり服薬することがとても大切です。

わからないことは
主治医に
質問しましょう！



自己判断で飲む薬の種類や量を変更してはいけません

主治医は患者さんの症状にあった治療薬の種類と量を考えて処方しています。また、治療薬のなかには、別の種類の薬と併用することで効果を発揮するものもあります。患者さんの自己判断で飲む薬の種類や量を変更してしまうと**薬の効果が得られないばかりか、思わぬ副作用がでることがあります。**



薬は服薬のタイミングをきちんと守りましょう

パーキンソン病治療薬のなかには、食前・食後など**服薬するタイミングによって効果と副作用の現れ方が異なるもの**があります。また、薬の効果を高め副作用の発現を少なくするために、1日の服薬回数や服薬のタイミングを微妙に調整する場合がありますので、薬は処方されたとおりに飲みましょう。



自己判断で服薬を中断・中止してはいけません

パーキンソン病治療薬では、服用していた薬を中断・中止したり、急激に減薬すると、まれですが、**生命に危険を及ぼす副作用（悪性症候群）が現れることがあります。**処方された薬について不安や不快な副作用がある場合には、自己判断で服薬を中断・中止せずに、主治医の先生に相談するようにしましょう。

副作用について知っておきましょう

副作用の現れ方は
患者さんによって
かなり違いがあります。

パーキンソン病治療薬で生じる副作用は、基本的に、副作用を抑える薬の併用、服薬量の調節、異なる治療薬への切り替えにより対応が可能です。下記のような副作用が現れたら、すぐに主治医の先生に相談するようにしましょう。



主な副作用

めまい・ふらつき
起立時にめまいやふらつきがみられます



不安・興奮
理由なく漠然とした不安を感じたり、イライラしたりします



吐き気・嘔吐
吐き気・嘔吐の他に食欲不振や胃部不快感などもみられます



幻覚・妄想
あるはずのないものが見えたり、非現実的なことを信じ込みます



ジスキネジア
自分の意思に反して手足や舌が勝手に動きます



パーキンソン病治療薬を服用して気になる副作用があれば主治医に相談してみましょう。



その他注意が必要な副作用

突発的睡眠
何の前触れもなく、突発的に眠りに陥ってしまいます。

心臓弁膜症
心臓が血液を送り出すときに逆流しないよう防ぐ働きをもつ弁が正しく機能しなくなります。

衝動制御障害
自己の欲望や行動を抑制することができず、衝動的な行動をとるようになります。賭け事へのめり込んでしまう病的賭博や性行動を抑えられない性行動亢進などがあります。